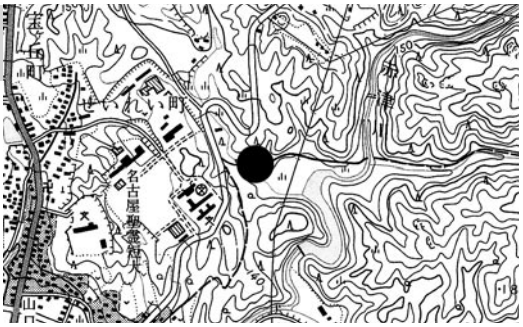
塚原（つかはら）1号窯跡



調査地点（1/2.5万「瀬戸」）

所　在　地　瀬戸市若宮町一丁目
（北緯35度12分14秒、東経137度6分45秒）
調査理由　道路改良工事国道248号
調査期間　平成18年9月～平成19年3月
調査面積　970㎡
担　当　者　小澤一弘・宇佐見　守・川添和暁

調査の経過　本調査は、国道248号道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて、愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。平成18年9月から平成19年3月までの予定で実施しており、調査面積は970㎡ある。

立地と環境　窯跡は矢田川（赤津川）が大きく南向から西向に屈曲する、右岸側の丘陵上に位置している。標高は丘陵上部で約140m。付近には、塚原1号墳などの古墳群の存在が知られており、本窯跡群と同一丘陵上には、若宮1号墳が存在する。また、矢田川を挟んだ南側の丘陵にも、広久手1号墳などの古墳や、百代寺窯跡・広久手1号窯跡など、古墳・窯業遺跡が集中している地域といえる。

調査の概要　本窯跡群からは、窯体が2基（塚原1号・3号窯跡）検出され、それぞれに対応する前庭部や整地された平坦面・灰原が調査された。1号窯・3号窯ともに、無釉陶器の山茶碗と施釉陶器の古瀬戸の両者を生産していた。山茶碗は第7型式、古瀬戸は前期第二段階に属し、1号窯・3号窯の遺物からの時期差は見られない。但し、塚原3号窯跡の検出状況および灰層など包含層の堆積状況から、最終焼成は、1号窯の方で行われていたと想定される。

塚原1号窯跡　窯体(001SY)は、全長8.9m・最大幅2.2m・最大高1.5m・床面傾斜は燃焼室で22度・焼成室で32度を測る。窯体は、丘陵中腹の標高131～136mに立地している。焚口から煙道部まで残存していた。特に注目されるのは、天井部の残存とダンパー部分の残存である。天井部のアーチは中央部で凸状に盛り上がっており、分焔柱付近が特に顕著であった。床面には焼台の一部が残存していた。床面を精査したところ、焼台痕の配列を床で確認することができたのは、大きな成果である。窯体内部は、赤色を呈している。また、ダンパー部分では、径3cmほどの木の棒を軸にして粘土を筒状に付けたものが、2つ見つかっている。1号窯跡に直接関連する遺構として、窯体西側を巡るカット部分(002SX)、窯体掘削土や、修復時に排出された土などによる盛土(003SX・007SX・008SX)、前庭部からの整地面(006SX)、灰層(009SX)がある。009SXの堆積は、より山側からの土砂堆積により変化したようであり、それを基準として上層・下層1～4と、下層5に大きく二分できる。厚いところで、2m30cmほどの堆積が確認された。また、窯体北部には、粘土の堆積層が存在しており、その付近で窪地化している部分が存在する(004SX)。この粘土の利用についても検討が必要である。

塚原3号窯跡　窯体(010SY)は、全長9.2m・最大幅3.0m・最大高1.5m・床面傾斜は燃焼室で30度・焼成室で20度を測る。窯体は、丘陵下段の標高123～129mに立地している。焚口から煙道部まで残存していた。窯体内部は、赤色を呈している。最終焼成後に燃焼室・焼

成室の床の硬化面を全面にわたってはがしたようである。燃焼室および焼成室下半では、そのはがされた床上に未焼成の粘土塊がまとまって出土した。最終焼成後の二次的利用の可能性も考えられる。３号窯跡に関連する遺構としては、窯体掘削土や、修復時に排出された土などによる盛土 (011SX)、灰原 (012SX) がある。011SX 上には、粘土たまりが数カ所で検出されており、一部は被熱で赤色化している。011SX は 009SX(１号窯跡灰原) の堆積をあまり受けておらず、１号窯操業時にも開けていた可能性がある。

遺物の出土状況

山茶碗 (片) の出土が多い場所と、古瀬戸 (片) の出土が多い場所は、異なるようである。006SX の北端を中心に、山茶碗の細片がまとまって出土した。009SX では形状がより残存した陶器片が出土するのとは対照的である。また、使用された陶器片 (調整具か) がまとまって出土している。現在、確認できているのは山茶碗片を利用したもののみである。多くは 006SX の掘削時に見つかっている。

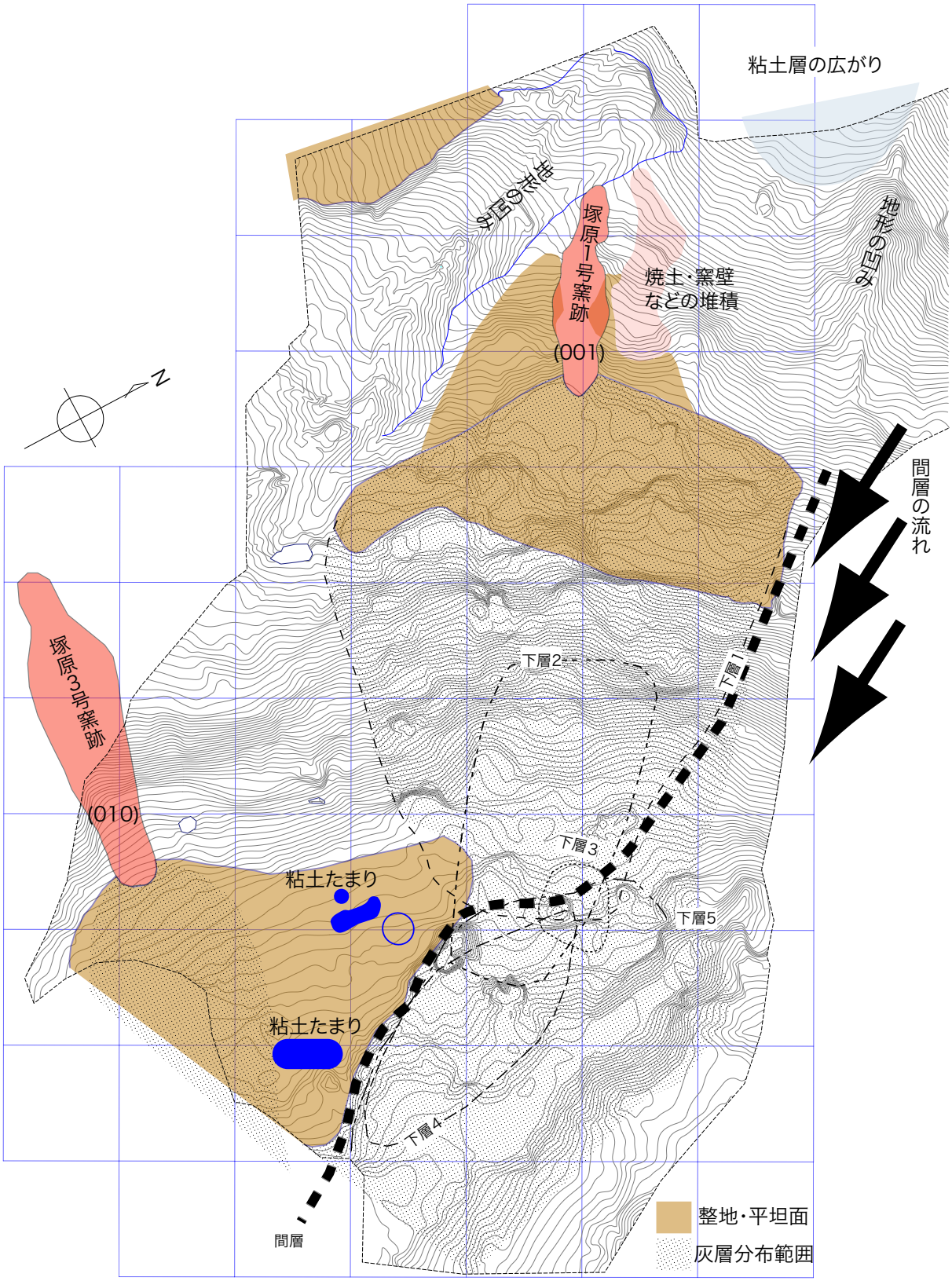
出土遺物の器種は、山茶碗系では碗・小皿、古瀬戸系では四耳壷・瓶子・水注・花瓶・卸皿・水滴などがあり、その他、鉢・入子・陶丸がある。古瀬戸系のなかで、はじめてとなる戯画が線刻された四耳壷片が、１号窯跡焚口付近から出土した。

陶器片とともに、多量の焼台 (片) が出土している。発色により、灰色のものと赤色のものに分けられる。灰色のものは内面形状が凹状を呈するものが多く、赤色のものは内面形状が凸状・凹状・浅い凹状など多様であり、砂利が付着しているものも散見される。前者が山茶碗、後者が古瀬戸に対応するとするならば、上述した陶器片の出土状況に、焼台の出土状況もおおよそ一致する。ただし、006SX の北端や 013SX など、陶器片に対して焼台の出土量が圧倒的に多い場所も存在する。

まとめ

遺跡全体はこれまで繰り返し盗掘を受けていたものの、保存状態は良好で、窯体のみならず、周辺に展開する一連の作業 (場) を総合して検討し得る調査事例となることが、最も大きな成果である。１号窯・３号窯の保存が良好であったことから、当該時期の窯業生産跡の指標となりうる調査例となったといえる。１号窯と３号窯との操業関係もさることながら、当該時期における山茶碗・古瀬戸の同時焼成の問題など、今後、検討する課題が多いと考えられる。　(川添和暁)

塚原１号窯　窯体断ち割り状況


粘土層の広がり
地形の広がり
地形の広がり
塚原1号窯跡
(001)
焼土・窯壁
などの堆積
N
間層の流れ
塚原3号窯跡
(010)
下層2
下層1
下層3
下層5
下層4
粘土たまり
粘土たまり
間層
整地・平坦面
灰層分布範囲

塚原窯跡群全景 (南より)

塚原１号窯跡 (001SY) 全景 (東より)

塚原１号窯跡 (001SY) 焼台痕配列 (東より)

３号窯跡（010SY）全景（西より）

戯画が線刻された四耳壺片